

## 冬のシュトゥットガルトより

口腔再建外科 小林 正 治

昨年9月にドイツのシュトゥットガルトに着任し、早いもので5ヶ月目に突入しました。この原稿が歯学部ニュースに掲載される頃には、帰国の途についているものと思われます。私の研修先は、Marienhospital Stuttgart（日本語に訳すとシュトゥットガルト聖マリア病院とでもなるのでしょうか？）の顎顔面口腔外科（Klinik für Mund-, Kiefer- und Gesichtschirurgie）で、客員医師（Gastarzt）として研修を受けています。ここでの仕事や生活は、私にとっては刺激的なことばかりでした。その一部を紹介したいと思います。

シュトゥットガルトはドイツ南西部バーデンヴュルテンベルク州の州都で、人口は59万人と新潟を一回り大きくした規模ですが、ブドウ畑や森に囲まれた緑豊かなとても素敵な街です。私のアパートは街の中心部から4キロほど南にあるのですが、休日などに近所を散歩していると、いろいろな小鳥達の鳴き声やキツツキのドラミングの音などが聞こえ、足元をリスが走り去って行ったりします。一方で、シュトゥットガルトにはベンツやポルシェ、ボツシュなどの本社があり、ドイツ産業の華と成りつつあります。シュトゥットガルトを中心としたこの地域はシュヴァーベン地方ともいっていますが、そこに住むシュヴァーベン人は勤勉で倹約家なのだそうです。ある時、若い麻酔科の女医が言っていました。“Ich bin Schwäbisch, nicht Deutsche. (私は、シュヴァーベン人で、ドイツ人ではないわ)”。民族としての独立意識も高いようです。

こちらに来る前は、冬に向かって一番悪い時期にドイツに行くことになるなと思っていたのですが、大きな間違いでした。この地域の文化に触れるには最適の時期であったかもしれません。9月

下旬から10月中旬には、カンシュタット祭り Canstatter Volksfest がこの街で開かれました。これは、有名なミュンヘンのオクトーバーフェストに次ぐ大きなビール祭りで、150年以上の歴史があるのだそうです。会場には、観覧車やジェットコースター、土産物屋などが並び、地元ビール会社の巨大なテントがいくつも設営され、陽気なシュヴァーベン人たちは、ビールを飲みながら生演奏に合わせてテーブルの上で踊りだしたり、テーブルの周りを練り歩いたりしていました。面白いことに、敷地内には様々な農機具や家畜用の牛や馬、羊や鶏などの檻が並び、商談が行われていました。まさに収穫祭という感じがしました。11月下旬からは、街の中心部にクリスマスマーケット Weihnachtsmarkt が立ち、賑わいました。これは、1692年から行われており、現在では「世界最大のクリスマスマーケット」と言われています。2月下旬の“バラの月曜日”には、ドイツ中で春を待望するお祭りカーニバルが開催されます。冬の気候も、雪はほとんど降らず、思ったほど寒くはありませんでした。新潟よりも過ごしやすそうに感じます。



1890年創立当時の建物で、病院のシンボルでもある Alter Marienbau

さて、仕事の話をしたと思います。Marienhospital Stuttgart は、カトリック系の私立病院なのですが、チュービンゲン大学の研修病院でもあります。創立は1890年で、現在では11外来784床を持ち、1,800人弱の職員が働いています。ここで客員医師として医療に従事するための手続きをしたのですが、これがなかなか大変でした。まず、渡航前に歯科医師免許証や卒業証書、戸籍抄本、履歴書、収入証明書などをドイツ語に訳してドイツ大使館の認証を受け、Marienhospital Stuttgart を通してドイツにおける歯科医師活動許可証の申請を行いました。ドイツに到着後、Marienhospital Stuttgart と客員医師としての無給雇用契約を結び、外国人局で滞在許可証を取得し、さらに労働局で労働許可証を取得しました。これですべて終了かと思っていたところ、Bezirkszahnarezttekammer Stuttgart なるところからクレームがきました。これは、たぶん地元の歯科医師会のような組織と思われるのですが、ここにも登録が必要だということでその手続きをしたところ、半年間の会費として120ユーロ（約1万6千円）も取られてしまいました。ヤレヤレです。

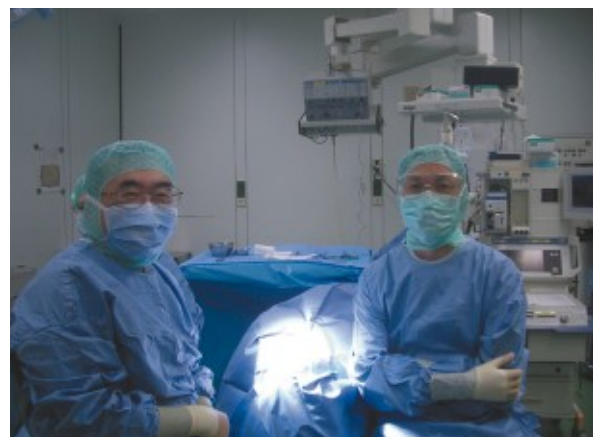
顎顔面口腔外科の主任教授は Prof.Dr.Dr. Dr.h.c Konrad Wangerin で、他に5名の顎顔面口腔外科医とタイからの研修医に私を加えた8名が常勤のスタッフです。また、いくつかの国外の大学とも提携しているようで、コスタリカ、ボリビア、ポーランドなどから顎顔面口腔外科医が数週間単位で研修に来ていました。一方で、こ

この上級医達がチリやインドネシアに医療指導に行っていました。

診療は朝の7時から始まります。病棟の回診後に、ミーティングと教授診察を行い、9時から手術や外来診察が開始となります。外来診察室は個室で2部屋あり、曜日で担当医が決まっていますが、患者は予約で来院するため外来に患者が溢れるようなことはありません。新患者はすべて紹介で、ドイツのみならず、イタリア、ウクライナ、ポーランドといった国からも来院していました。手術室は病院全体で18室あり、4ヶ所に分散していますが、われわれは常時2室の手術室を使用できます。手術は毎日行われ、2003年10月から2004年1月までの4ヶ月間における顎顔面口腔外科の手術件数は、全身麻酔症例が271例、鎮静法・局所麻酔症例が242例でした。これは、かなりの症例数だと思います。私は、毎日主として顎変形症や口唇口蓋裂の手術とインプラント関連の手術に入れてもらっているのですが、これまで見たこともないような症例に遭遇したり、新しい手術手技や医療器具に触れることができ、大変勉強になっています。手術もいろいろとやらせていただいているのですが、慣れるまでは大変でした。ドイツ語がままならない上に、道具や術式など勝手が違い、最初のうちは思うようにできずに落ち込んでいました。“郷に入っては郷に従え”といいますが、こちらのやり方に合わせるのは難しいものです。サッカーの高原選手が、ドイツのブンデスリーガでなかなか活躍できないことが分かるような気がしました。



朝の教授診察



手術室にて（術者の Prof. Wangerin を待っている）

私が研修先としてこの病院を選んだ最大の理由は、顎骨延長法をわれわれの医療体系の中にどのように位置付けるかを検討するためでした。骨延長法とは、骨移植をせずに骨組織を増やすことができる新しい治療法で、整形外科領域で発達しましたが、顎顔面領域でもこの10年間で急速に進歩しました。Prof. Wangerinはこの顎骨延長法に関してはパイオニアの一人で、Medicon社とともに種々の顎骨延長装置を開発してきており、私が来てからも新しい上顎骨延長装置の開発を行っていました。顎骨延長法は、下顎骨延長に始まり、上顎骨延長、歯槽骨延長、顎骨再建術への応用など様々な症例に適応が拡大してきましたが、適応症や適用方法、適用時期、装置の選択など再評価の時期に来ていると言えます。Prof. Wangerinからは、これまでに施行した顎骨延長症例を提示していただき、いろいろと意見を伺うことができました。また、10月にはこの病院において顎骨延長法に関する国際会議“3rd International Symposium on Distraction Osteogenesis and Orthognathic Surgery”が開かれました。演者には、アメリカのProf. BellやフランスのProf. Diner、ベネズエラのProf. Guerreroなど第一線の臨床家が集まり、私には大変参考になりました。ここで得られた資料をもとに、新潟大学における顎骨延長法の適用指針を関係各位とともに検討した

いと考えています。

もう一つ、思いもかけず得られた収穫が、インプラント前外科処置に関する研修を受けることができたことです。新潟大学においても、インプラント前外科処置として骨移植やサイナスリフトを多数例行ってきましたが、ここの症例数は桁違いで、移植骨も下顎骨や腸骨だけでなく、頭蓋骨や培養骨、人工骨など症例に合わせて種々使用されていました。11月には、“Was tun, wenn Knochen fehlt? [What to do if bone is absent?]”というインプラント前外科処置に関するシンポジウムがこの病院で開かれ、ドイツのみならずデンマークやオーストリアからも演者を招聘して、骨移植や歯槽骨延長、サイナスリフト、PRPやBMPの応用、メカニカルストレスによる骨形成促進法などの最新の研究が報告されました。新潟大学では、インプラントに関する高度先進医療が認可され、今後ますますインプラント前外科処置の適用症例が増えるものと思われます。帰国後には、ここで得た知識や技術を、より多くの新潟の患者さん達に還元できればと考えています。

最後に、このような海外研修の機会を与えてくださいました齊藤教授、不在中の職務をサポートしてくださっている口腔再建外科のスタッフ、新潟大学歯学部の皆様に深く感謝いたします。

